

巻頭言

本書は現役で活躍中の救急救命士のために書かれた問題集である。

救急隊員として活動するためには、国家試験対策とは違う観点から知識を整理する必要がある。たとえば国家試験には、疾患名を推測させる“病名当て”や、病態の理解を尋ねる問題がしばしば出題される。しかし、実際の現場で重要なのは別のことであろう、という趣旨で従来にないタイプの救急救命士用問題集を作ることとした。

救急救命士は、発症の状況（または受傷機転）、自覚症状、基本的な身体所見を基に処置と搬送の内容を決め、限られた時間内に実施する。これは、病歴、身体所見、検査所見から病名、進行度、合併症を診断し、あらゆる治療法のなかから最適のものを選んで実施するという医師の診療行為とは似て非なるものである。

この点を踏まえ、本書では疾患名の判断や病態への言及を最小限とし、現場で得られる情報を基に具体的な対応法を尋ねる実践的な問題の作成を心掛けた。意外に大変な作業であり、日常的に行う試験問題の作成に比べて、多くの手間暇を要した。

問題数は119問で緊急通報用電話番号と一致させた。さほど多い数ではないが、国家試験では取り扱わなかった領域もある。受験対策用として見れば不備と思われるかもしれないが、日常業務の疑問に答えるという点では、これまでの問題集になかったものを多少なりとも付け加えることができたのではないかと思う。

問題の水準は平易を旨とした。文字数はなるべく少なくして図表をできるかぎり各問に付けた。図の多くはオリジナルであり、苦勞した部分でもある。問題の形式は五者択一式にこだわらず、重要な主題については異なる角度から問い直し、より立体的な理解を図った。また、多くの実際の事例がそうであるように、正誤が明確に決め難い問題もあえて混ぜてある。これらはいずれも、本書を、学力の評価ではなく勉強の手段とすることを目的としたためである。

本書は順番に1問ずつ解いていってもよいし、気が向いたときに、たまたま開いたページを眺めてもよい。いずれにせよ、できれば何回か目を通されることをお勧めする。その過程で新たな疑問が湧き、読者自身でもっと調べてみようという意欲の高まりにつながれば、望外の喜びである。

平成31年1月

桂田 菊嗣
瀧野 昌也

本書の使い方

1. 対象とする読者について

現役の救急救命士を念頭に置いている。救急救命士養成課程にある人にも有用と思われるが、国家試験対策のための問題集ではない。

2. 問題の並べ方

特定の事項についての知識や判断を短文で問う問題（基本問題）を前半（Q 1～86）に、仮定の事例における観察・判断・処置等について問う問題（応用問題）を後半（Q87～119）にまとめ、それぞれのなかでは領域にかかわらず順不同に並べてある。実際の救急活動では、次にどのような傷病者に遭遇するかを予測できないからである。

3. 特定の領域について勉強したいとき

1つの領域について集中的に勉強したいときには、p. ix にあげた領域分類表に従って希望の領域に関する問題を選択していただきたい。領域は、「人体の構造と機能（解剖，生理）」「救急活動一般（制度，法令，活動総論）」「観察，処置」「内因性疾患，症候」「外傷」「外傷以外の外因性疾患」の6つである。

4. 問題の形式について

五者択一式問題のほか、単純な選択式問題、正答数を示さずに正しい選択肢を選ばせる問題、記述式問題等がある。このため、1つの問題を解くのにかかる時間はさまざまであり、時間を決めて解答し学力を評価するという使い方を求めている。

5. 問題を解くにあたって

問題を解くことにより自分の知識の限界が明らかになる。面倒がらずに自分の知識の引き出しを全部開けて問題に突き合わせ、1問ずつ、必要なだけ時間をかけて解くことをお勧めする。

Q 1

JCS (ジャパンコーマスケール) と GCS (グラスゴーコーマスケール) について正しいのはどれか。

1. JCS では覚醒の程度によって大きく分類する。
2. GCS では意識レベルが低下するほど数字が大きくなる。
3. 除脳姿勢があれば GCS による評価ができない。
4. JCS 300に相当する GCS は3である。
5. GCS 5 (E 1 V 1 M 3) に相当する JCS は30である。

Q 119 65歳の男性。高血圧で近医に通院中である。自宅で食事中、突然強い腹痛を訴え始めた。

救急隊到着時観察所見：畳の上に寝かされている。顔貌は苦悶様、蒼白で冷汗を認めるが、会話はできる。呼吸数24回/分。脈拍数110回/分、整。血圧90/60mmHg。体温36.2℃。SpO₂値97%（空気呼吸）。呼吸音は清。胃や臍のあたりが痛いという。

- ① 病院や診療科を選定するうえでとくに重要な観察項目をあげよ。
- ② 搬送時間20分の病院を選定した。必要な処置をあげよ。